

村田彰先生との研究交流を振り返って

研究仲間と職場の同僚を代表して

西島良尚

村田先生とのおつきあいは、いつごろからでしたでしょうか。たしか二〇〇四年頃に、私が大学院生時代から畏敬していた樫寿夫先生の主催される民法の研究会（樫民法塾）に入れていただいて、そこで、先にそのメンバーであった村田先生と出会ったのが最初だったと思います。そこには、先輩格の中舎寛樹、織田博子、三林宏の各先生や、村田先生と私とはほぼ同年代の前田泰、長坂純、中山知己、武川幸嗣、芦野訓和などの各氏が（今は学会で重きをなしている面々ですが、当時はまだみんな若手でした）参加されていました。当時の研究会のメンバーは全員研究者で実務家（弁護士）は私だけでした。研究会では、共同研究の大きなテーマである「条文のない民法の制度や概念の研究」「多角的法律関係の研究」「強行法と任意法で見る民法」などなどから、各メンバーが関心があるテーマにつき、報告を行い研究を進めていき、最終的には共著の研究書にまとめるのが目標となります。

各報告者に対しては椿先生や中舎先生などから厳しい指摘がなされ、同年代からも遠慮のない手厳しい「質問」が飛んできます。報告に当たる者は、例外なく大変緊張して準備を行うのが常でした。私の村田先生への印象は、そうした研究会の雰囲気の中での、研究者としての村田先生の姿から始まりました。

ただし、研究会が終わった後は、ほぼ決まって、椿先生も含めて飲み会になるのですが、ここでは、椿先生のお人柄もあって、ザックバラン、特に同年代どうしでは、軽口もたたきながらの楽しい雰囲気になります。当時の私にとっては、日ごろの目の前の事件に追われ続ける実務家の生活の中で、目前の事件にすぐに役立ちものではなけれどその根本にかかわる大きなテーマを深く掘り下げていく勉強は、新鮮で、日ごろの実務の中でたまっていくストレスが浄化されるように感じられました。週末には、裁判の準備などと並行して、研究テーマの勉強時間をとることが一向に苦になりませんでした。

そうした研究会で、私に対しても、村田先生は、遠慮のない質問や指摘をされつつも、共感を覚えるときはその旨をはっきりと述べ、親切なアドバイスもしてくれる親しみのある仲間の代表格でした。もちろん、時には激しい議論になることもありましたが、お互いに真摯に学問に向き合う研究仲間どうしの信頼関係が強まっていく関係だったと思います。

そうした研究会での切磋琢磨の中で、我々「若手」も徐々に力をつけていったように思います。なかでも村田先生は、「多角的法律関係」に関する研究の中の基礎理論に関わるテーマである「契約の成否・結合と多角的法律関係」を執筆され（椿寿夫・中舎寛樹編『多角的法律関係の研究』（日本評論社、二〇一二年）一二七頁以下所収）高い評価を得ています。ここでは、伝統的な二当事者の法律行為ないし契約における「意思表示」の理論が、保証取引や承諾転貸取引のように三当事者以上が関与する全体として一つの「取引」といえる場面においては、全体としての取引の「システム」に包摂される部分としての「契約」（サブシステム）

における「意思」の変容が許容されることを論証されようとしています。この村田論稿について、椿寿夫博士が次のように述べておられます。「基礎理論としては村田彰「契約の成否・結合と多角的法律関係」(カッコ内略)が、¹取引のシステム性²と、³関係者の意思⁴との反比例関係に触れている。ドイツの学者シュメツケルらが代理における個人意思の退潮を説くことと合わせ、私見はこの見方に強い関心がある」(椿「《多角》関係《三角》関係について」椿・中舎編前掲『多角的法律関係の研究』一八頁)と述べられています。椿博士が、村田論稿を高く評価されていることは明らかです。

そのほかにも、研究者としての村田先生は、「意思表示」あるいは「意思能力」に関する基礎理論がライフワークであり、成年後見法学会では常任理事として長年学会に貢献もしてきました。また、「温泉権」に関しては川島武宜博士の系統の代表的研究者でもあり、さらに社会学・経済史学にとどまらず芥川をはじめとする近代文学にも深い造詣を持たれています。村田先生のこれまでの業績の積み重ねは、誰もが高く評価するものです。私の村田先生の印象はこうした研究者としての印象が大きなものです。

他方、大学内での同僚としての村田先生はどうかというと、違った側面があったというのが正直なところでしょう。私も二〇〇五年頃から、本学も含めたいくつかの大学の非常勤講師を経て本学の専任教員として大学の仕事に参加することになりました。大学内では、既に村田先生は法学部長であり、学内行政で重きをなしておられました。研究会では寸暇を惜しんで学問にいそしむ学究的な印象が強かったのですが、学内行政でその政治的な才能があることに、当初は意外でした。二〇一五年まで五期一〇年学部長の重責を果たしてこられました。本人は、早くやめて勉強に専念したいとおりにふれ述べておられました。それはそれで本心であったようですが、学内行政を続けて担う意思も強く、どうも本人自身どこかで矛盾したものを抱えていたのかもしれない。学生の学びの環境や教員の職場環境の改善等に自身の才能を發揮したいという気持ちを強く持って

おられたように思えます。リーダーシップが強すぎる面もありましたが、私も含め同僚の皆さんも、村田先生に任せておけばそれで学内行政がつつがなく進んでいくので、村田先生の政治的能力や面倒見のいいことに、我々同僚が依存し責任を委ねすぎたのではないかと省みないではいられません。

職責を全うされ、名誉教授ともなられた現在、わずらわしい雑務から解放されて、今こそ好きな学問に没頭できるときです。健康面の配慮の必要性はあるのかと思いますが、学問を志した研究者としての初一念である書物を読み考え続ける強い意志をもっておられるように思います。今後とも、ご自身のご研究を継続されるであろうことを心から強く念じつつ、そして、我々も村田先生に負けないように自分なりの学問へ限りなき挑戦をすることを誓いつつ、この小文を終えたいと思います。

以
上